

デダ亭さん

源氏鶏太著

デブ亭さん



源氏鶏太

著者 源氏鶏太

発行者 高嶋雄三郎

昭和三〇年一月三十一日印刷・昭和三〇年二月一日發行

印刷 祥美印刷株式会社 村上義夫・製本 矢野製本所

發行所 東京都豊島区長崎二ノ一四 電話落合(95)五三二二

振替東京一六七八〇四 株式会社 学風書院

定価 一三〇円

目

次

鰻と草履と羽織	七
ニヤリ哲学の悲哀	一九
女房と煙草錢	三二
刑事と酒	四三
太郎と花子	五五
美人との相乗り	六四
私の手帳より	六六
よさこい節	八五
佐渡の女中さん	九三
パチンコ人生	一〇三
傷に玉	一二三
デブ亭さん	一三五
重役と重役夫人	一三七
地上最大のサービス	一四五
正月早々	一五三

内職の悲喜劇……………	一六九
交際について……………	一七四
虚栄について……………	一七七
良人よ、毅然たれ……………	一八〇
新人サラリーマンへ……………	一八四
職場の女性……………	一八七
サラリー・ガールへ……………	一九三
アイスクャンディ……………	二〇〇
日曜日の人生……………	二〇九
佐渡のそば……………	二一九
酒と私……………	二三四
ボリーナス袋出勤……………	二三九
親孝行……………	二四六
いけにえ……………	二四〇
君の名は——……………	二四八

デ
ブ
亭
さ
ん

装
幀

横
川
信
幸

鰻と草履と羽織

「あなたは、明日の土曜日の午後、何かご予定がありますか。」

と、女房が云つた。

「いや、別に無いが。」

と、私は答えた。

答えてしまつてから、これは何か難題を持ちかけられるんだな、と思つた。それで、私は、あわてて云つた。

「いや、映画を見たい、と思つてゐるんだ。」

「何んの映画ですか。」

「そこまではきめていない。」

「何時頃からご覧になりたいんですか。」

「それもきめていない。」

「では、三時頃からご覧になつて下さい。」

「何んです。」

「それまで、私につきあつて頂きたいのです。」

「何んでつきあうんだ。」

「おばあちゃんにコートを買つてあげたいのです。」

「何んでおばあちゃんにコートを買つてやるんだ。」

「こないだ、法事のために、田舎へ帰つたとき見たら、おばあちゃんのコートが、随分といたんでいました。」

「すると、おばあちゃんが、新しいコートを買ってくれ、と云つたのか。」

「いいえ。」

と、女房は、澄まし込んで、

「でも、私は、嫁の立場として、おばあちゃんに、あんな古びたコートを着せとくに忍びません。だから、買つてあげたいのです。親孝行がしたいのです。」

「じやア、お前が行つて、買つて来たらいいではないか。」

「でも、おばあちゃんは、私一人で行つて買つて来た、と云うよりも、あなたもいつしよに行

つて、二人で見立てて買つて来た、と云つた方が、およろこびになるに違いありません。」

「じやア、お前が一人で行つて買つて来て、おばあちゃんには、二人で行つて買つて来た、と云つてやればいいさ。」

「それはいけません。」

「何んでだ。」

「親をだましては、せつかくの親孝行が、台無しになります。」

「黙つていれば、分るもんか。」

「でも、私は、良心の呵責を感じます。ですから、どうしても、あしたの午後は、私といつしよに、呉服屋さんへ行つて頂きたいのです。」

「面倒臭い奴だな。」

と、私は、顔をしかめた。

「嫌なんですか。」

「そう云うわけでもないんだが。」

「では、私みたいなオタフクさんといつしよに歩くのが、恥かしいんですか。」

「いや、行くよ、行きますよ。」

「ああ、嬉しい、ねえ、ついでに——」

「何？」

私は、警戒した。

「あのね。」

「何んだ、早く、云え。」

「お昼ごはんをいつしよに喰べたいんですが、いけません？」

「俺の会社は、土曜日は十二時までだが、十二時過ぎてすぐに出るわけにはいかんよ。」

「私は、何時まででも待ちますわ。平気よ。本当は、鰻が喰べたいんですよ。あなたが時々いらつしやる日本橋の鰻屋さん、とてもおいしいんでしょう？ だから、いつぺん、私にも喰べさせてよ。」

「うん。」

私は、とうとう、承諾させられてしまった。呉服屋は、京橋にあるので、どうせそこまで出るなら、鰻屋をつき合ってもいい、と思つたのである。それに、私は、前々から、その鰻のうまいことを女房に自慢していたので、こう云う羽目になるのも、自業自得のようなものであつたかも知れない。しかし、すっかり有頂天になつている女房の顔を見ると、私は、女房をよ

ろこばせてやるくらい、お安いもんだ、と思つた。

私の母は、八十歳であるが、田舎で暮している。先日、女房と子供たちを連れて、法事のために帰省した。母親が自分からコートをねだることは無いだろうから、やつぱり、女房の自発的な親孝行に違いあるまい、と私は思つた。自分の母親のために、女房の方から積極的に心をくばってくれるのは、嬉しい気がした。そう云う女房に、鰻をご馳走してやるのは、一種のゴホウビのようなものである。

翌日、一時に日本橋の三越横の喫茶店で、私たちは、落合うことにきめた。しかし、私は、会社の仕事の関係で、実際にその喫茶店は行けたのは、一時半であつた。女房は、一時十分前から来て待つていた。岩波文庫風の本を読んで待つていたが、私の姿を見ると、すぐ、ニコニコして立つて来た。

「せかつく入つたんだから、俺もコーヒーぐらい飲まんと、この店に対して悪いな。」

「あら、そんなの、もつたないわ。黙つて出ればいいのよ。さア、早く、鰻屋へ行きましよう。」

と、女房は、さつさと勘定を払つて、外に出た。

鰻ごはんは、うまかつた。女房は、喰べ終るまでに、三度ぐらい、おいしいわ、と云つた。

鰻屋を出ると、すぐ目の前に三越がある。私は、このまま京橋の呉服屋へ行くのか、と思つていたら、

「ねえ、ちよつと、三越へ寄つてみませんか？」

と、女房が云い出した。

「何んで三越へなんか寄るんだ。」

「あたしのゾウリ、もう、五年も履いたんで、ダメになりかかっていますのよ。」

「すると、ゾウリを買うのか。」

「そりやア買つて貰えたら、とても、嬉しいですわ。」

「しかし、今日は、そう云う予定では無かつた筈だぞ。」

「ええ、分っています。だから、見るだけ。近頃、どんなゾウリが流行しているか、ちよつと、

見るだけならいいでしょう？」

「よし、見るだけなら。」

と、私は、念を押した。

私たちは、電車通りを横切つて、三越へ入つて云つた。入口には、人待ち顔の人がたくさん立つていた。若い人が多かつたが、なかには私たちのように中年の人もいた。待ちくたびれて

いる顔もあれば、胸をときめかしている顔もあった。人さまざまと云うところであろう。

ゾウリ売場へ行くと、

「近頃は、踵の高いゾウリが流行しているんですつて。私も、いつぺん、あんなゾウリを履いてみたいわ。」

「そうかね。」

と、私は、なるべく、無関心な態度を装っていた。

「ねえ、あの色、いいわねえ。」

「うん。」

「それとも、こつちの方が、私に似合うかしら？」

「さアね。」

「あら、あの色、素敵だね。値段だつて、手頃だね。ちよつと、それを見せて下さいまん？」

女房は、売子に云つた。売子は、すぐに、出してくれた。私は、わざと、横の方を見ていた。それから、そこらを散歩するように、ブラブラと歩きかけると、うしろから、

「あなた、あなた。」

と、女房が呼んだ。

「何んだ。」

「これ、どうお？」

「うん。」

「いいでしょう？」

「さアね。」

「三千二百円よ。」

「そうかね。」

「買つてくださる？」

私は、苦笑してしまつた。売子の前で、こうはつきり云われては、もう処置なしであつた。私は、頷くより仕方がなかつた。してやられたような気分であつた。

「ありがとう。とても、嬉しいわ。」

女房は、ゾウリを包んで貰つて、いそいそと私に寄り添うてくる。三越を出ると、私は、タクシーで京橋まで行こう、と云つた。女房は、散歩のつもりで歩きましょう、だつて、ゾウリを買つて頂いたんだから、すこしでも、ケンヤクをしなくては、と殊勝なことを云つた。

「いや、やつぱり、タクシーにしよう。でないと、歩いていると、途中に、いろいろの店があ